

高等学校

平成 4 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

国 語

東 京 都 教 育 委 員 会

平成4年度

教 育 研 究 員 名 簿

№	学区	学 校 名	氏 名
1	2	都 立 戸 山 高 等 学 校	鈴 木 春 子
2	2	都 立 千 歳 丘 高 等 学 校	吉 原 泰 輔
3	3	都 立 永 福 高 等 学 校	瀬 野 光 孝
4	4	都 立 北 高 等 学 校	藤 田 正 美
5	4	都 立 大 山 高 等 学 校	山 田 一 郎
6	4	都 立 高 島 高 等 学 校	神 能 精 一
7	5	都 立 京 橋 高 等 学 校	黒 澤 今 日 子
8	5	都 立 足 立 工 業 高 等 学 校	辻 井 伸 江
9	6	都 立 篠 崎 高 等 学 校	小 村 健 二
10	7	都 立 富 士 森 高 等 学 校	内 山 興 治
11	8	都 立 秋 川 高 等 学 校	小 野 村 浩
12	10	都 立 府 中 西 高 等 学 校	小 島 義 晴

担 当

教育庁 指導部高等学校教育指導課 指導主事 菅 沢 茂

— 研 究 主 題 —

主体的な学習活動を通して，言語感覚を磨き，理解力と表現力を高める指導の在り方

目 次

I 主題設定の理由	2
II 主題解明の方法	2
III 指導の実際	4
1 主体的な学習活動を通して，理解力と表現力を高める現代文指導の工夫	4
2 主体的な学習活動を通して，理解力と表現力を高める古典指導の工夫	9
3 主体的な学習活動を通して，言語感覚を磨き，表現力を高める作文指導の工夫 ...	14
4 主体的な学習活動を通して，理解力と表現力を高める音声言語指導の工夫	19
IV まとめと今後の課題	24

主題：主体的な学習活動を通して、言語感覚を磨き、理解力と表現力を高める指導の在り方

I 主題設定の理由

二十一世紀を目前にした現在、国際社会の変化には目を見張るものがある。情報は一瞬のうちに世界を回り、昨日までの価値観が翌日には通用しなくなるという可能性も孕んでいる。そうした状況の中で、我々日本人だけが安閑としていることはできない。世界の情勢を踏まえると同時に、自国の社会変化を的確に把握し、判断し、行動することで、逞しく生き抜くことが求められている。その際に必要とされる能力は、何よりもまず、言語活動を通して養われるものとする。

今日、高校生は多くの視聴覚機器の恩恵に預かっているが、言語環境としては必ずしも好ましい状況とは言えない。また、自分の学習課題を設定して取り組むなどの、国語の学習に対する意欲も不足している。こうした背景が、今まさに「主体的な学習」が必要とされる所以である。その主体性を培うために、まず、生徒の国語に対する興味・関心を引き出すことが必要である。すなわち、生徒の内発的な動機付けを通して、豊かな思考力や想像力を養うとともに、理解と表現の能力を育み言語感覚を磨くことが求められている。

「言語感覚を磨く」のは、特別の学習を必要とするものではない。日頃の授業の中で、継続的に、計画的な学習指導の蓄積が図られた結果、はじめて育成されるものである。今日、生徒が日常接する言語情報、とりわけ音声による情報量は驚くほど多い。生徒は、これらの情報を取捨選択して言語を吟味し、自らも相手に納得のいく音声表現を心掛けることが必要である。それゆえ、日々の教育活動の具体的な場面において、生徒が言葉の適切さや美しさについて感覚を磨き、表現の効果について適切な判断ができるようにすることが、一層大切である。我々は、一人一人の個性を重視しながら、生徒との心の触れ合いを保ち、互いに切磋琢磨できる授業、国語を学ぶことの楽しさと充実感を体験することのできる授業、その創造のために、標記の主題を設定し、様々な角度からの研究を試みた。

II 主題解明の方法

主題解明に当たっては、以下のとおり、「現代文」3班及び「古典」1班に分けて実践し、①「詩による現代文の指導」②「歌物語による古典の指導」③「小論文による作文の指導」④「スピーチによる音声言語の指導」の各研究活動を行った。

「主体的な学習活動を通して、理解力と表現力を高める現代文指導の工夫」では、まず、詩を学ぶことの戸惑いを和らげるため、生徒の興味・関心のある教材を発掘することに努めた。次に、とかく「分からない」の一言で片付けられがちな詩の学習を、生徒が主体的に鑑賞し、

解釈できるように計画し、取り組ませた。そして、内容の理解できない語句や表現について、生徒自身が問題文を作成し、それを生徒全体の問題として考えるという方法を取った。さらに、グループによる意見交換の場の設定、アンケート・相互評価・小作文の実施など、授業展開を様々に工夫することにより、生徒が詩のテーマと関連のある、人間としての在り方生き方についての考えを深めるよう配慮した。

「主体的な学習活動を通して、理解力と表現力を高める古典指導の工夫」では、「歌物語」の読解や鑑賞を通じて、古典になれ親しむとともに、古人の豊かな心情への共感を図ろうとした。その際、グループによる課題学習を設定し、活発な意見交換や課題プリント、作品についての話し合い及び自分の班の意見を文章にまとめる活動などを通して、読解を深める学習の展開を図った。こうした文学作品の鑑賞を中心に据えた授業により、生徒の主体的な学習態度を育む指導を工夫した。

「主体的な学習活動を通して、言語感覚を磨き、表現力を高める作文指導の工夫」では、生徒が意欲的に授業に参加し、生徒一人一人の表現力が段階的に向上していくことを目標とした。具体的な方法としては、生徒がペンネームを使って匿名で相互に添削批評を行うことや、毎回小論文の主題設定に工夫を凝らすなどにより、生徒の思考を深めるよう意図した。また、明確な評価基準の設定を目指し、次の課題への継続的指導の指針とした。特に、相互批評の中で、視覚的にわかりやすい表示を試みた。

「主体的な学習活動を通して、理解力と表現力を高める音声言語指導の工夫」では、多くの生徒が苦手とする「話す」「聞く」ことの態度や技術を身に付けることを目標にした。まず、簡単なテーマによるスピーチとその聞き取りから始め、発表に不可欠な条件を生徒自身のスピーチのビデオを見ながら考えさせた。これは、考えて話す、考えながら聞くことの一体性を体得させることがねらいである。そして、より深いテーマで話し合うことによって、聞く→考える→話すのサイクルを習得できるように、全体の指導の手順を計画的に組み立てた。

以上、4通りの実践は、全て生徒の主体性を引き出すことをねらいとして、①教材選定の吟味、②動的な授業展開への改善、③新しい評価観等の導入を意図して行ったものである。教材選定に当たっては、特に生徒の興味・関心を引き出すように考慮した。また、個別学習やグループ学習、作業や発表などの動きを積極的に授業に取り入れるとともに、視聴覚教材の活用を図った。さらに、毎時間の指導の過程を的確に評価し、生徒の学習意欲を喚起するとともに、生徒の学習態度から指導者自らが反省するという基本的な評価の姿勢を貫き、授業の質的改善を目指した。

Ⅲ 指導の実際

1 主体的な学習活動を通して、理解力と表現力を高める現代文指導の工夫

1. 単元 現代詩に親しむ

2. 教材 「生命は」吉野 弘 「汲むーY・Yにー」茨木のり子（「国語Ⅱ」）

3. 単元目標

- ① 現代詩を読む楽しさが増す鑑賞の仕方を身に付ける。
- ② 表現の特徴を味わい、言語への関心を高める。
- ③ 詩の鑑賞を通して、自己の生き方・人間としての在り方について考える。
- ④ 自ら進んで読み味わい、表現する意欲を身に付ける。

4. 単元設定の理由

教える側にとっても、学ぶ側にとっても、現代詩の授業にはある種の戸惑いを覚えることがある。それは他ならぬ詩が、他の形式の文章作品にくらべて、優れて彫琢されている言語の質と量によるものと思える。生徒は、一読して「好き・嫌い」で片付けがちであり、主体的学習の深まりへと発展させにくい。当然のことながら、文学作品の鑑賞の在り方は、最終的に個々の読み手に委ねられるのは避けられない。しかし、生徒が詩の授業において「分かる・分からない」をすぐに断ずることのないよう指導していきたい。また、表現の技巧や用語の解釈に終始するだけでなく、言語表現の豊かさを味わう学習を工夫する必要があると考える。こうした認識から研究は出発した。

今回、標記の主題を設定し、現代文の作品を広く見渡してみた。そして、主題の文言の一つ一つの課題を現代詩の指導においても生かすべきだと考えた。そこで、従来のように解釈中心に終わらず、広がりを持った学習とするために、現代の高校生の生き方にかかわる詩を何編か選び出してみた。「かなしみ」（谷川俊太郎）「くらし」（石垣りん）など、またとない言葉の力を備えた数々の詩の中から、「生命は」「汲むーY・Yにー」を教材として用いることに決定した。「生命は」は題の示すように、生命の在り方を問いかけるものであり、「汲むーY・Yにー」は、「人の生き方」に一つの答を導くものである。つまり、両編が「生」を描いたものとして連関し、学習に一貫性が備わるよう工夫をした。もとより詩に限らず文学作品は「生」を大きな主題とし、すべてがこの問題を含んでいると言えなくはないが、この2編はそれが中心に据えられているのである。「生」の意味を生徒自らの生き方と重ね合わせて考えるよう設定したものである。

「主体的に学習する」とは、生徒一人一人が興味・関心を持って、教材に身を乗り出して取り組む状態と言えよう。ここでは、青年期に生きる生徒が、詩に描かれた「生」を我がこととしてとらえる。そして、自らの生命を見つめ、意欲的に学習に参加してもらいたい、という期待をこめて教材を選択した。詳しくは指導計画に示す通りであるが、教材への導入から学習のまとめにいたるまで、学習活動の流れが緊密にはたらくよう配慮した。比較的、用語の平易な「生命は」を先におくことによって、基本的な学習による理解力の向上を目指した。「汲むーY・Yにー」では、更に言語感覚を培い、自らの表現力を高める学習の在り方へと結び付けるよう配慮した。2編とも難解な語を用いたわけではない。

それぞれが詩人の真情に基づいた言葉をえりすぐって、巧みに組み合わせてある。その結果、魅力のある言語表現となったことに注意をはらい、鑑賞指導を進めることとした。このことを通して、生徒自身の発する言葉にこれまで以上の表現上の工夫を期待するとともに、生徒自身が言葉のもつ力に改めて気づき、自らの言葉を新たに発見していく機会の一つとすることをねらいとした。

5. 指導計画（第2学年対象 配当時間6時間）

	指 導 事 項	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第 1 時	〔導入〕 〔展開〕 ＜生命は＞ ①詩の優れた表現に気付く。 ②生徒各自が主題を考える。	①今まで習った詩について思い起こし、詩について持っているイメージを発表する。 ②範読を聞き、その後、各自黙読する。 ③読んだ感想をまとめる。印象に残った表現を挙げる。作者の言いたかったことをおまかにまとめる。	①詩が好きな理由、嫌いな理由を述べさせ、以後の指導に役立てる。 ②表現や主題に注意しながら読むよう指示する。 ③それぞれノートに4, 5行程度で簡潔にまとめさせる。
第	①表現に注意して内容を理解する力を身に付ける。	①内容の理解できない語句・表現の解釈をする。	①「欠如、他者の総和、うとましくゆるやかに構成されている」などの語に特に注意する。

2 時	②詩の技巧とその表現効果について理解する。	②「ばらまかれている、ゆるやかに構成されている」などの用語、対句などの表現技巧とその効果を考える。 ③どのように詩が展開されているか、構成をとらえる。	②用語については他の語に置き換えさせる作業を通して、その表現の適切さを理解させる。表現技巧については、第1時の印象に残った表現と関連づけて指導する。
第3 時	①キーワードに注意して主題をとらえる。 ②次の詩についての意欲・関心を高める。	①内容の解釈が済んでいる段階でもう一度作者の言いたかったことをまとめ、第1時のまとめと比較してみる。 ②「大人になるとはどうなることか」について自己の考えを小作文にまとめる。	①主題をとらえる際には、「生命はその中に欠如を抱きそれを他者から満たしてもらう、あなたもあるとき私のための風だったかもしれない」などの部分に注目させる。 ②この時点で生徒が「大人になるとはどういうことか」についてどのような認識を持っているかを見る。 次時まで印刷物にまとめて配布する。
第4 時	<汲む> ①相互評価を通して考えを深める。 ②疑問点を書き出す作業を通して、詩を自らの力で理解する態度を身に付ける。	①「大人になるとはどうなることか」の印刷物を読んでそれに対するコメントを記す。 ②朗読する。 ③内容の理解できない語句・表現を書き抜き、問題を作成する。意味の分からない語については辞書を引く。	①コメントが書き易いように小作文を書いた人の氏名は載せない。 次時まで印刷物にまとめて提示する。 ②挙手読みにし、意欲を評価する。 読みの誤りを指摘する。 ③作業がしやすいように図書室などを利用することも考える。 机間巡視しアドバイスを与える。 提出させたものを印刷物にまとめて、一人一人の問題を全体の問題とする。

第 5 時	①優れた詩の表現 を実感として理解 する。 ②キーワードを自 ら見つける作業を 通して、主題を理 解する。	①前時で作った問題を全員で 解釈していく。 ②使われている比喩表現とそ の効果を考える。 ③キーワードに注目して作者 の言いたかったことをまとめ る。	②「たよりない生牡蠣のような」 などの比喩を他の語に置き換えず、 感覚として理解させ言語感覚を磨 かせる。 ③「すれっからし、感受性」など のキーワードを見つけさせ、それ を元に、主題をとらえさせる。 グループ学習させてもよい。
第 6 時	〔まとめ〕 人間としての在 り方生き方につい て考えを深める。	これまでの学習を踏まえて、 「生命」「大人になること」 について発見のあったことを 400字程度にまとめる。	第3時で書いた小作文と比べさ せて考えの深化に気づかせるよう にする。

6. 評価の観点

① 事前評価

<関心・意欲>

- ・詩（韻文）についてどのような印象を持っているか。

② 事中評価

<意欲・態度>

- ・一読後の自己の意見を感想にまとめることができたか。
- ・詩の気に入った表現、好きな表現を挙げることができたか。
- ・疑問点を挙げ、さらに問題を導き出すことができたか。

<理解>

- ・問題を解決していくことを通して、主題を把握することができたか。

③ 事後評価

<理解・表現・態度>

- ・詩を通して自己の生き方を問い直す姿勢を持ち、人間としての生き方在り方につ
いて考え深め、意見としてまとめることができたか。

7. 考 察

詩というだけで生徒の側にはある種の抵抗がある。それは今まで学んだ詩は言葉がむずかしくて何を言っているのかわからないから嫌いだというたぐいのものである。今回の実践で取りあげた2編の詩、特に「生命は」は、そのような生徒の心を解き放してくれるきっかけになったと思われる。洗練された言葉遣い、押し付けることのない心暖まる表現を「生命（精神）の在り方」という重いテーマにもかかわらず、生徒は素直に受け入れたようである。また「汲むーY・Yにー」は、一つの具体的な生き方を示すものだが、生徒にとっては自己の姿をまざまざと映し出す鏡の役割をしたようだ。生徒が2編の詩を身近に、しかも新鮮な感覚で受けとめ我がこととして関心をもち始めたことは、今回の実践の大きな手助けとなった。

生徒の生の声をそのまま活かす形での授業を目指した。自己の誤りを指摘されることを恐れてか、あるいは指示されることが当たり前となっているからか、生徒は発言したがないのが実情である。そこで、アンケートを通して生徒一人一人に意見を求め、それを集約し生徒に還元するという方法を取った。「詩の中の気に入った表現を挙げる」「疑問点を挙げる（問題を作る）」「詩の主題に関してコメントを求める」といった具合に意見を求めた。全員に意見を求めていくことは手間のかかることだが、生徒にとって他の意見を知ることは刺激となり、授業の活性化に大いに役立った。特に問題点をまとめたところでは、問題意識をもって詩に向かう姿勢が芽生えたようである。

ただ今回の実践において、問題点を解決していく段階での工夫が不十分であり、この点を今後の課題としたい。また、詩に対する抵抗がなくなった生徒や、詩が好きになった生徒が格段に増えたわけではない。しかし生徒はいつになく自らを詩の中におき、自らの人生を問い直し、考え直したのではないだろうか。初発の感想などよりも最終時の作文に、大きな深化がみられたのは一つの成果といえるだろう。

最後に、「生命は」の中で生徒が好きなものとしてあげた表現は「私も あるとき／誰かのための虹だったろう／あなたも あるとき／私のための風だったかもしれない」という最後の部分が多かった。また最終時の作文で「汲む」の詩に強い感銘を受け「自分も詩の中の女性のように生きたい」と述べた女子生徒が多くいた。このこと一つを取りあげても、今の高校生の感受性は決して劣っているものではない。彼らはその感受したものを深め、外に表現する方法のところで手をこまねているのではないか。今回の実践は必ずしも新しい試みではないかもしれないが、何かをつかもうとする生き生きとした生徒の姿が、授業の中にあったことは大きな収穫であった。

2. 主体的な学習活動を通して、理解力と表現力を高める古典指導の工夫

1. 単元 歌物語の魅力を知る

2. 教材 『伊勢物語』（日本古典文学全集）

（八四段「さらぬ別れ」、六段「鬼ひとくち」、九段「東下り」）

3. 単元の目標 ①1年次に身に付けた古文の語彙・文法事項を踏まえ、古語のもつ幅広い意味や微妙なニュアンスをつかむことにより、登場人物の心情を考察し、鑑賞を深める。

②グループによる課題学習の作業を通して、話し合いやまとめの文章化の中で表現力を培う。

③主体的な学習活動を通して、古典の世界への興味を深め、自発的な学習態度を育てる。

4. 単元設定の理由

高校に入学し、しばらく経ってから、古典の授業の感想を生徒達に聞いてみると、多くの生徒から、「難しい」「覚えることが多くて大変だ」「英語を日本語に訳すよりも苦勞する」といったような答えが返ってくる。日々の授業を担当している教師にとってそれは非常に残念なことである。教師は、生徒に繰り返し古典の世界の楽しさ・面白さを語り、伝えようとしている。なぜ、生徒の反応は教師の意図するところと逆を示してしまうのだろうか。

古典の学習を通して、生徒は何を期待し、何を学ぼうと考えているのか。普段の授業において、古語の意味を知り、文法を習得し、口語訳ができれば終わり、単に「古文」を「現代文」に置き換えることが古文の学習であるかのように考えているのではないだろうか。

このような疑問の前に、素直に振り返ってみると、教師は古典の楽しさ・面白さを語り伝えようとしてはいるものの、授業の形態も講義形式で、語句の注釈、文法の説明、口語訳という一定の型にはまりがちで、その奥にある人間の営みそのものにまでは生徒の意識を引き込んでいない、という反省点が浮かび上がってくる。そして、この反省点・問題点を意識しながらも、指導の方法・パターンがなかなか変えられないでいる。

生徒の方も、説明を聞き、質問に答える、といった教師主導型の授業の中で、自らが積極的に学習するという意識が育ちにくい。こうした生徒の状況を踏まえて、生徒自らが主体的に古典の学習に取り組むように転換していくことが、今求められている。

そのためには、生徒に古典の世界への関心を抱かせ、自らの疑問や独自の発想を提起させ、作品を読み解かせていくことが必要である。そして、古典の語句のもつ幅広い意味や微妙なニ

ュアンスをとらえさせ、さらに、描かれた場面・状況から登場人物の心情を考察させることが大切である。このような学習を、生徒に自発的・主体的に取り組ませることを目指して、前記の単元の目標を設定した。

そのための工夫として、グループによる課題学習を考えた。教師が生徒達に知識を授けるのではなくて、生徒達が自らの試行錯誤の中で、語句の意味・登場人物の心情などを考え、それらをグループの中で取捨選択しながら、ある一つの結論を導き出すことができれば、生徒自身の積極性が培われるのではないかと考えたからである。

作品は『伊勢物語』を選んだ。文法、語彙、作品の背景、和歌など、様々な角度からアプローチできる作品である。特に、地の文と和歌の融合、和歌特有の表現などの学習により、言語感覚を磨くという観点から適当と考えられる。教材は業平的世界を描いた3編、八四段「さらぬ別れ」、六段「鬼ひとくち」、九段「東下り」である。これらは教科書に多く採られている作品である。一段一段が比較的短いので、課題の内容がはやけず、明確さを失わないということ、また、古典世界を十分に有しながら、「親子の愛情」「男女の愛情」といった普遍的人間の愛を描いており、全体を通して、人間の「愛」がテーマになっていること、さらに、現代の若者にも共感を得るものと考えられる点から選定した。以上の点を踏まえ、指導計画を立てた。

5. 指導計画（第2学年対象、配当時間9時間）

A. 学習展開のあらまし（2時間を1単位として次表のように展開する）

	指 導 事 項	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第 1 時	グループ学習の仕方を身に付けさせる。	①グループに分れる。 ②課題学習プリントに取り組む。 ③グループ内で話し合いをし、文章にまとめ、提出する。	①生徒の学習活動（話し合い・まとめ）が整理できるプリントを配る。 ②学習に必要な辞書・参考資料などの利用に慣れさせる。 ③机間巡視し、適宜課題解決のための示唆や資料などを紹介する。
	他人の意見を参考に読解・鑑賞を深め、知識の定着を図る。	①返却された課題について検討する。 ②他班の解釈と比較検討し	①提出された「学習課題プリント」にコメントを加え返却する。 ②提出された課題をテーマごとに

時	たり，補足説明を聞き，読解・鑑賞を深める。	各班の意見として，プリントして配り批評を加えながら補足説明する。
---	-----------------------	----------------------------------

B. 具体的な学習内容

	学 習 内 容	留 意 点
第1時	〔導入〕伊勢物語の内容・文学的位置・歌物語について確認する。 ①伊勢物語についての概略を押さえる。 〔展開〕「さらぬ別れ」 ②主人公（以下男）と母の立場をつかむ。 ③和歌に込められた母と男の心情をとらえる。 ④親子の愛情を読み取る。	①「伊勢物語」について説明する。 ②歌と地の文とのつながりを生かし歌から入り，物語を通して再び歌に収約していく方向で指導する。 ③死を意識した母と男（一人息子）との愛情のやり取りを段全体の中でとらえさせる。
第2時	①プリントを見ながら，本文の解釈をする。 ②他班の解釈と比較検討しながら読みを深める。 ア. 男と母の立場 イ. 歌に込められた心情 ウ. 主題 ③班毎に鑑賞文を読む。 ④在原業平について確認し，伊勢物語の「昔男」の人物像との関連をつかむ。	①自分達と他班との異同に注意させる。 ア. 男と母の身分，位置，「十二月」の急用の意味。 イ. 正しく解釈できるようにする。 ②業平の系図を利用し，男と母の関係をより明確にする。
第3・4時	「鬼ひとくち」 ①男と女の立場をつかむ。 ②男の女に対する気持ち，女を失ったときの心情をとらえる。 ③地の文と和歌の関連を理解する。 （第4時＝第2時①～③の方法で，内容を深める） ④後段の本文から在原業平とその周辺の人物を確認し，伊勢物語との関連についてつかむ。	①女の高貴な身分に気付かせる。 ②場面・状況などを正しく読み取らせる。 ③和歌が筋のクライマックスに位置し，心情の昇華であることに気付かせる。 ④業平・藤原氏の系図を利用する。 ⑤平安貴族の男女関係，結婚形態について説明する。

第 5 1 8 時	「東下り」 ①男が旅に出た動機とその原因を考える。 ②旅の状況をとらえ、それぞれの場面での男の心情をとらえる。 ③各段での都からの距離感・時間をつかむ。 ④和歌の修辞法の理解を深め、詩情を感得する。 ⑤歌物語の成立について考える。物語の中で和歌がどのような役割を果たしているか考える。	①前時との関連・業平と二条の后との恋の展開の視点からとらえさせる。 ②当時の旅の困難さに気付かせる。 ③旧国名を地図などで確認させる。 ④各段の季節を考えさせる。 ⑤望郷・妻への思いを認識させる。 ⑥歌を詠むことが、他者の共感を呼ぶものであることに注意させる。
第 9 時	〔まとめ〕 ①歌物語の特質について話し合う。 ②三つの段からどのような人間の愛情が読みとれるか主題・鑑賞文としてまとめる。	①自由に話し合わせ、文章としてまとめられるような指導をする。

6. 評価の観点 ①語の意味を適切にとらえることにより、心情を読みとることができたか。
- ②グループ内で、他の学習者との意見交換を通して、鑑賞を深め、文章としてまとめることができたか。
- ③学習に必要な辞書、参考資料（要覧・注釈書など）の利用に慣れ、自発的な学習の中で古典世界への興味をもつことができたか。

7. 考 察

今回のような学習形態によって、授業を実践した各校とも、生徒は当初指導者が予想していた以上に意欲的に取り組んだ。中には課題解決に時間をとられ、十分な話し合いまでいけない班もあったが、分担しながら全員が最後まで課題に対して、積極的に取り組んでいた。また、提出された各班の意見は、次の授業の資料として直接に提示した。その結果、必然的に他班と比較されることになる。他班の読みの的確さや文章のまとめのうまさ刺激されて、自分達の読みの浅さ、まとめの文章の拙さを知ることにもなる。そして、他班よりも優れたものにしよう、よい意味で競争し、オリジナリティを出そうと意欲的になった。その結果、指導者が予期せぬ意外な読解の発見もあった。

（A校一対象第1学年2学期）提出された課題に対して、次の授業までにコメントや評価を加えて返却したためか、取り組み方も、教材を重ねるごとに意欲的になって行った。辞書や要

覧などの参考資料の活用はもちろんのこと、図書館などで注釈書や解説書などを利用していた班も多く、授業外でも主体的に学習活動が行なわれていた。学習に対する生徒の感想も「大変だったが、面白かった。古典の世界に興味を持った。他の人の意見が聞けてよかった。」など、おおむね好評であり、課題解決の目標は、ほぼ達せられたように思われる。また、少なくともこうした学習を通して、古典が嫌いになった生徒はいなかった。主体的に学習することの過程は努力を必要とするが、作品への理解が深まり、異質な世界に興味をもつという楽しみにつながっていくということに、生徒が気付きはじめたものと思われる。

（B校—対象第2学年2学期）1年時に学習した語彙や文法を踏まえ、さらに新しい語の意味をとらえながら、登場人物の立場を整理し、心情を考察しながら読みを深めていく姿勢が見られた。自発的に司会・進行の役を務める者が出て、一語一語の意味、文脈の流れを押さえながら全員で取り組んでいく班も出てきた。グループ内での話し合いで解決がみられない時には、積極的に教師に発問してくる生徒がいた。そういう自発的な姿勢に対して、ちょっとした示唆を与えるとの確な解釈ができるようになった。

（C校—対象第2学年2学期）今回のこの単元においては、単元の目標・単元設定の理由に即して、文法に関する学習活動は極力排除した。古典の授業で、グループ活動などを全く経験したことなかった生徒は、突然のグループでの作業の指示に、最初は驚きとともに、けげんな表情を浮かべる者もいた。机を向い合わせにしたものの、意見交換の一声も最初の時間には出てこなかったクラスもあった。生徒の実態によっては、グループ活動による古典学習は無理なのではないかとも思ったが、時間を経るにしたがって、徐々にグループ内での話し合いが活発になったのは事実である。普段は興味を示さなかった生徒が、嬉しそうに自分の意見を述べている姿を見せてくれた。このような姿から、今回のグループによる課題学習は新しい試みで生徒も指導者もとまどったが、成果は十分あったと考える。

これらの自ら調べ、疑問を持ち、グループの話し合いの中で他者との意見交換をする学習活動により、生徒の主体的な鑑賞を深めることができたと思われる。またグループの話し合いを通して、生徒一人一人の学習への参加意欲を高め、古典嫌い、古典離れになっている生徒を再び古典の授業に引き戻すこと、また、古典好きな生徒をより深い読解・鑑賞に導くことができたと考える。日頃受け身の姿勢の生徒達が生き生きと学習に取り組み、更に古典の世界へ関心を深めるきっかけになったと思われる。

しかしながら、通常の授業形態と比較して、およそ倍の時間がかかった。この点に関しては年間の授業計画の中での位置付けなどを十分に考慮しなければならないものと思われる。

3 主体的な学習活動を通して、言語感覚を磨き、表現力を高める指導の工夫

1. 単 元 相互批評を通して他者の表現を理解し自己の表現を磨く

2. 教 材 「ブランド品はロゴをはがして」

(大平 健 著『豊かさの精神病理』より)

3. 単元の目標 ① 主体的な相互の批評活動を通して他者の言語に出会い自己の表現を磨く。

② 主体的な相互の批評活動を通して自他の生き方を見つめ直す。

4. 単元設定の理由

国語表現の目的の一つは、書き言葉において自己表現する力を養うことにある。課題を与え、また資料を与え作文を課す。提出された作文に添削を施し講評を加え返却し、再度書き直すことにより、作文能力の一層の向上を図り、更に主題を掘り下げていく。こうした地道な指導を、適切な課題設定及び的確な事前・事中の評価に基づいて行う必要がある。ここでは従来行ってきたこの方法を生かすとともに、更に別の視点から生徒の現在の言語環境をとらえた新たな方法を模索した。必ずしも最近の高校生の言語能力が従来より劣っているとは即断はできない。例えば生徒は困難な事態を楽々とパロディー化してしまうなど、驚くほど柔軟な力を感じさせることもある。しかし、その力をそのまま認めることはできない。自分自身や自分の直面する事実を、真摯に思考する契機を逸する場合も多いと感ずるからである。また、現在の高校生は世界の現在を構成する主題群について、関心は乏しいが、適切な機会を与えれば我がこととして真剣に思考し始める。ここでは生徒をめぐる言語環境の中で、ある種の言語経験が不足しているのとらえた。ある種の言語経験の不足とは日常の人間関係において、他者の言語に対する配慮が少ないということである。それは他者の言語と結び合う経験、すなわち、他者と人間的に交流する経験の不足ということである。そこで本研究では「書き言葉」において他者と出会い、きり結ぶ方法を模索した。これまでの作文指導の基本は生徒の作品に対する指導者の添削・講評によって成り立ってきた。ここに存在するのは2種類の言語でしかない。生徒の言語と指導者の言語との出会いであり、書き直しを通してより深い対話を試みるというものである。そこで今回はもう一つの方向を探った。それは生徒自身による相互添削・批評を2度繰り返し、更に指導者の講評を加えていくことである。それが「相互批評」である。ここでは、表現者本人の作品を入れると4種類の言語を経験することになる。

共通テーマによる生徒の作品群を通読してみると、論旨、表現、展開方法などが、実によく似通っている場合が多い。このことが、相互批評を取り入れるきっかけとなった。「相互批評」は生徒自身がそのことに気付く機会を与える。しかし、本研究は必ずしも「個性的・独創的」

な表現を目指すのではない。他の生徒の作品にふれる機会を持ち、論旨や表現の共通性・同一性とともに、他者と自己の表現の差異に気付くこと、同一性と差異性をともに含んだ他者の言語に出会う経験がこの試みのモチーフである。いたずらに個性や独創を求めるのではなく、他者の具体的な言語を経験することで、自己の思考と表現を磨くことを目指したのである。

さらに、この試みのもう一つのモチーフは、「批評」という概念の正確な把握にある。他者との豊かなコミュニケーションを図るならば、他者への価値判断や批評を避けて通ることはできない。実りある批評を学ぶ契機を与えたいと願った。「批評」とは単に批判することではなく、対象をよく味わうことである。単に分析することではなく、対象への強度の指向性を基盤にするものである。生徒は他に批評されるということに慣れてはいない。自分が表現したものの持つ客観的な意味にも未熟である。読者とは本来誤読をするものであるという事実にも慣れてはいない。誤読をも含めてコミュニケーションは成り立っていく、という事実もこの「相互批評」を通して経験させたいと考えた。

本教材は「将来が全部見えてしまって……」と語る高校生が話題になっている。登校途中にカウンセラーのもとに立ち寄り語り始めるうちに、彼女の最も大きな関心がファッションにあることが分かってくる。そしてブランド品に対して複雑で独特な思いを抱いていることもわかってくる。話題は彼女の父母のことにも及び彼女自身の人生観も見えてくる。現代の豊かな日本社会を背景に、この高校生の心の動きを通して生徒各自が持つ幸福のイメージに対し、真に豊かな生き方とはなにか、という問いを経験させようと意図した。相互批評とは他者の思考に積極的に関与する方途でもある。この教材は、生徒が自らの主題として取り組みやすい素材であろうと考えた。

事前指導として社会の「豊かさ」を示す統計資料と現代人のアイデンティティーの危機に関する資料文を与え、生徒の思考が社会的な広がりも持つように配慮した。

5. 指導計画（3年生対象 配当時間5時間）

	指導事項	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第	①テーマについて考える。	①意識調査をもとに「豊かさ」について考えさせる。 ②今回の小論文の作成作業について方法の説明をする。 ③課題文「ブランド品はロゴをはがして」	①方法の説明では、課題の意味・相互批評の意味について分かりやすく説明する。

1 時		を示して、テーマを指示する。 ④本単元で自分が使用するペンネームを考える。	②ペンネームについて意義を説明する。
第 2 時	①課題小論文を書く。	①課題文「ブランド品はロゴをはがして」を読んで、600字以上800字以内の小論文を書く。(ペンネーム使用) ②時間内に終わらなかった者については自宅での課題とし、次回までに完成させることとする。	①原稿用紙の使い方や構成・段落分けについて説明する。
第 3 時	①課題小論文を提出させる。 ②第一回相互批評をする。	①課題小論文を提出させ、回収した作品を無作為に配布する。 ②ペンネームを使って、第一回目の添削・批評を行う。(用紙の書式については文末記入例参照) ③一時返却して、自分の作品に対する添削・批評を読む。	①偶然に自分の作品がまわってきたら再回収して再配布する。 ②添削・批評・評価の意味について説明を加え、正しく理解させる。
第 4 時	①第二回相互批評をする。	①前回と同じ作業を繰り返し、第二回目の添削・批評をする。 ②一時返却して、第二回目の添削・批評を読んでから提出する。	①自分の作品や同じ作品に当たった場合は、前回と同じ処理をする。
第 5 時	①作品を返却する。 ②第二回課題小論文を書く。	①前回の作品に教師が総評をつけて返却する。 ②第二回課題として「My favorite person -この人のこんな生き方に豊かさを感じる-」を書いて提出する。	①前回の課題小論文が本時の課題小論文に生きるようにする。 ②人物紹介も含め、未知の読者が読んでも理解できるように留意させる。

6. 評価の観点

- ①事中評価 ・批評が一般的感想にならぬよう指示を与え、まだ向上の余地のある点と、よい点とをともに指摘することができたか。
- ②事後評価 ・「発想」「表現」「構成」「理解」「形式」の5項目について視覚的に表現された生徒による評価が、公正であるか。
 - ・他者の作品に対して積極的に関与していったか。

7. 考察

事前にペンネームを各自考案させた。実在の他の生徒名を付けるなど、問題のあるペンネームについては指導をした場面もあったが、結果としてペンネームを使用させたことはよかった。言葉によって他者を直接批評したり、されたりする経験のない者にとって、批評されることは辛い経験だ。厳しい言葉を使ってしまうこともある。言葉の持つ遠近感に未熟な彼らが受ける衝撃をペンネームは微温化してくれた。しかし最も興味深い反応を見せたのも、自分の作品に対する添削・批評を読んだ時である。生徒が自分の文章に強い愛着をもっていることがよく分かる。彼らは否定的な批評に対してはなかなか納得しようとしなない。多くの場合、批評者が指摘する部分にはなんらかの問題があった。ただ的は射ているのだが、射抜いてはいない批評が多いので納得できないことがあった。指摘された部分が、曖昧な表現だったり、不十分な表現だったり、また誤解されやすい表現である場合に指導者の指摘は重要な事中評価の役割を果たした。今回、新たな評価方法を取り入れた。これは、発想・表現・構成・理解・形式の五項目について、生徒が相互に5段階の評価を加えて視覚的に表現する方法だったが、これには大きな問題点が存在することが分かった。すなわち、評価者は意欲的に取り組むが、評価される者が過剰に反応してしまい、評価の視点や批評の内容よりも、評価の数値ばかりに関心が集中してしまい、相互批評の本来の目的から逸脱してしまう生徒もみられたということである。しかし、数値を用いて相互に評価させることは慎重に行わなければならないという教訓を得ることができた。

今回、5時間の時間配当ではやや不足であるという印象が残り、各校の実情に合わせて、予定を超えて継続することが必要である。この指導案では、課題小論文を二つ用意した。複数の他者の言語に出会いつつ、段階的に学習者の視点や思考が深まり、文章表現が練磨されるというねらいがあった。この目標が十分達成されたと考えることができる生徒の作品を、第二課題の“My favorite person”に見ることができた。第一課題の「豊かさ」に関する考察が第二課題に生かされた、主体的な発想による作品を見い出すことができたのである。しかし、

他者の具体的な言語を経験することを通して、自己の思考と表現を磨くというねらいも、また、実りある「批評」を学ぶというねらいも、この相互批評の試みを継続的に実行することなしに達成できるとは思えない。第二課題について、相互批評を施し、さらに第三、第四の課題を与えてゆくことで所期の目的が達成されるように思われた。また、今回はペンネームという匿名性の下に実施した相互批評であるが、やがては実名の下に実施できる段階が来ることを目指している。

中には、批評文が一般的な感想に終わってしまう場合もあった。その場合、他者の言語に関与することの意義を語り、再度批評文を書かせた。しかし、本研究を通して、現在の高校生が他者に対して決して無関心ではないと感ずることができた。今後、我々が異質の他者と共存するための精神的な方途を模索する上でも、他者に対する生徒の関心の質を正しく伸ばす必要がある。今回、国語表現の単位として取り上げたが、国際社会に生きるための原型となるべき思考や表現の姿勢を学ぶためには、国語Ⅰ、国語Ⅱを学習する中にも表現的要素を取り入れ、他者への理解を踏まえた豊かな自己表現の学習を模索すべきだと考える。

○ ○ ○

氏 の 作 品

批評1 ペンネーム 日下部 拓

自分の考えや理想などがよく書けていて良かったと思う。
 文末の表現を考えて、もっとまとめ書いていけば、もっと良くなると思う。
 “誰が”と“どこ”という部分を明確に……。

批評2 ペンネーム 佐々木 絵

共感できる部分がいくつかあった。それでも敢えて筆者がこの少女にそのこと(精神面での豊かさ)を教えるのは何故だろうか？そこまで深く分析すると良かった。文章は非常に解りにくい。一度書いて読み返してはいないだろうか？もっと真剣に書いた方が良いと思った。

発想

形式

理解

構成

表現

発想

形式

理解

構成

表現

作品についての批評

論旨がわかり明瞭である。評価している点、それをどう評価している点も研究して、話の筋や登場人物の心理など、自然な流れで展開するものがいい。

4 主体的な学習活動を通して、理解力と表現力を高める音声言語指導の工夫

1. 単元 話し合いの基礎を作る
2. 教材 <第1回 題目> ア 春と秋 イ 犬と猫
<第2回 題目> 勤労観・職業観について
3. 単元の目標 ① 「話す」ことと「聞く」ことに慣れる。
② 効果的な話し方を考え実践する。
③ 話の内容がより効果的になるように工夫する。
④ 話し合いの基本的な練習をする。

4. 単元設定の理由

(1) 第三者との間に必要な「正しい会話」

生徒の日常の言語生活は授業の場合も一方通行で「聞く」だけに終始してしまい、学校外の場合においても大量な情報の波に押し流されて、十分なコミュニケーションが成立しているとは言いがたい状況がある。それと同時に友人以外の第三者に対しては逆に言い放しの片道通行の会話しかできない者が多い。

このような「会話」の不成立ないしは未成熟の原因として、国語科の領域では「第三者の話を正しく聞き・話す」訓練の不足を挙げることができる。お互いの意思を通わせるために、まず相手の話を正確に聞き・内容を理解することの重要性を認識させることが訓練の第一歩と考えられる。

その上、その訓練と同時に正確に自分の意思を第三者に伝えるための、音声言語による自己表現手段・方法を育成して行かねばならない。すなわち、「聞く」ことと「話す」ことの訓練を同時に行う必要がある。

(2) 「聞く」・「話す」指導の重要性

従来ややもすると高校国語科の指導は「読む」・「書く」の解釈中心の指導に偏りがちであった。そして、我々が日常の言語生活を営む上で欠かせない「聞く」・「話す」指導がどちらかという見過ごされがちであった。このような現状の中、高等学校段階ではどのような目標・目的を掲げて指導するのか、教材にはどのようなものが考えられるのか、具体的な指導方法はどのようにされるべきか、評価方法はどうか考えたらよいのか。先人達の幾つかの試みや報告はあるものの、多くの点で未解決の分野が残されている。

(3) 国際化の中で母国語を尊重する態度の育成

「日本語の乱れ」については以前から憂慮されてはいるものの、その対策について高校の

現場で今までどの程度議論され、実践されてきただろうか。外国語の習得に力を入れることと対照的に日本語の乱れについてはあまり考えられてきていないと言える。「国際化」の掛け声の中手薄になってしまった「母国語」を尊重する態度を着実に育成することが我々に要求されている。

そのためには、生徒に正確に「聞き」・「話す」態度、技術を習得させることを考えねばならない。国際人とはまず正しく母国語を使いこなす人であるということを確実に認識させる必要がある。

5. 指導計画（第3学年対象 配当時間6時間）

	指導事項・内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第1時	①単元のねらい及び本時の説明・注意。 ②第1回目題目の提示。 ③第2回目題目へ向けてアンケートを取る。 ④第1回目の発表者を決める。（各派メイン1名サブ2名）	①第1回目題目について自分の立場を決め、その理由・意見を200字程度にまとめる。 ②「勤労観・職業観」に関するアンケートに答える。 ③発表者は、他の生徒の文章を参考にして発表できるようにまとめる。	①第1回目の題目は、初めての経験であるから、できるだけ生徒にとって身近な問題を取り上げる。 ②机間巡視をして、うまく書けない生徒には発表を意識しすぎず気楽に書くよう助言する。 ③発表者には、各自の役割を説明する。（但し細かい指導はしない）
第2時	①第1回目のスピーチを行う。 ②スピーチをビデオに撮る。 ③聞いている生徒にはメモを取らせる。	①メインの発表者は、自分達の意見を発表する。 ②サブの発表者は相手の主張に対する質問をする。 ③発表者3名で協議の上相手の質問に答える。 ④聞いている生徒はメモに取り、要旨をまとめる。 ⑤最後に判定を下す。	①聞き手には、話し手が発表しやすいよう指導をし、発表者の話を聞いているか観察する。 ②スピーチとスピーチの間に時間をとり、メモの整理ができるようにする。 ④聞き手には、特に印象に残った言葉や判定の理由など、なるべく文章を書かせるようにする。

第 3 時	①前時のビデオを見る。 ②「より良いスピーチのための数項目」を書く。 ③発表者を決める。	①ビデオを見ながら、良かった点、改善点を箇条書きにする。 ②発表者は、他の生徒の書いた文章を参考にして発表できるようまとめる。	①できるだけ生徒自身で気付かせるよう、あまり指示を与えない。 ②悪かった点ばかりでなく、良い点を必ず見付けて書くよう指導する。
第 4 時	①発表者は「より良いスピーチのための数項目」を発表する。 ②聞き手は正確に聞き取りプリントに記入する。 ③質疑応答をする。 ④③の結果からクラス独自の数項目を発表する。	①発表者は自分たちでまとめた数項目を聞き手が書き取りやすいように留意して発表する。 ②聞き手は数項目のメモを取り、質問・反対意見を考え発表する。 ③発表者はそれに答える。 ④発表者は質疑応答の結果からクラス独自の数項目をまとめる。	①この発表は音声のみで、黒板やプリントは使わせない。 ②聞き手にはしっかりメモを取らせ、音声を聞き取り内容を掴ませる練習とする。 ③発表者の話すスピードや聞き手のメモの取り方について、助言する。
第 5 時	①第1時に行った「勤労観・職業観」アンケートの結果を配布する。 ②第2回目題目の提示。 ③発表者を決める。	①自分の立場を決め、理由・意見を200字程度にまとめる。 ②発表者は、他の生徒の文章を参考に、よく打ち合わせをしておく。	①アンケート結果について生徒の興味を喚起するため補説する。 ②筆が進まない生徒には、助言を与える。 ③発表者も聞き手も自分の役割をよく理解させる。 ④説得力ある文章を書くよう具体的に指導する。
第	①第2回目のスピーチを行う。 ②スピーチをビデオに	①メインの発表者は自分の班の意見を発表する。 ②聞き手は意見の要旨を	①「より良いスピーチのための数項目」を参考に、スピーチを工夫させる。

6 時	撮る。	メモし、質問する。	②2度目のスピーチなので、聞き手のマナーの徹底を図る。
	③質疑応答する。 ④単元をまとめる。	③3人で協議の上、サブの発表者が中心となって質問に答える。 ④聞き手は質疑の内容をメモする。	③単元のまとめとして、今後の言語生活の充実のための助言を与える。

6. 評価の観点

- ① 話し合いの実践を通して、的確に話すこと・正確に聞くことができたか。
- ② 話す経験を通して、効果的な話し方（声の大きさなど）について考えが深まったか。
- ③ 話の内容をより効果的にするために、調べたり取材したりなどの工夫をしたか。
- ④ 話し合いの実践を通して、話し合いの基本的な練習は十分できたか。
- ⑤ 意欲的に話し合いに参加し、自分の考えをしっかりと持ち、的確に表現できたか。

7. 考 察

第1回スピーチでは、まず題目の選定が問題となった。いきなり「外来語、省略語は是か非か」といったようなテーマでは話が続かない。そこで、「春と秋」「犬と猫」といったような生徒たちにとって身近で簡単なテーマを提示した。あるクラスでは題目を選ぶに当たって、話し易い題目を選ぶため議論になった例もある。生徒は、発表のために本や新聞などを調べたり、中には地元の警察署（春と秋の犯罪件数）や保健所（犬の予防接種や不妊手術）に取材に行ったりするなど、かなり中身の濃いものとなった。

スピーチの様子はビデオに録画した。このビデオを教材にして、どうしたら上手なスピーチができるかを生徒に考えさせるためである。従ってスピーチの事前指導は必要最小限にとどめた。予測通り、「声の大きさ、姿勢、話すスピード」といった細かい指摘から、「具体的な例示が的確で分かりやすいものであるか」といった、話の内容に関することまで様々な意見が出された。また実際に発表を行った生徒からも、「黒板やプリントを使う」とか、「具体例を工夫する」など経験者ならではの鋭い指摘もあった。これをクラス毎に数項目にまとめ発表させ、これを今後のスピーチにおける目標として提示した。生徒の主体的学習生活の中から生まれてきた数々の指摘は、思っていた以上に鋭く核心をついたものが多くあった。

第2回目のスピーチでは、テーマを「勤労観・職業観」とした。生徒たちにとって身近な問題であると考えたからである。アンケートの結果から「経済派」（経済重視）「個性派」（個性

重視)「社会派」(社会性重視)3派に分けて話し合わせたが、論点がかみ合わなくてうまく行かない。自分の考えを主張するのに一生懸命で、相手の話に耳を傾けようとしない。そこで、各派の論点を事前に提出させ論点を明確にし、どう答えるかを検討させた上で話し合いをさせることにした。話すべき内容を事前に検討できるので、発表者も余裕を持って相手の話を聞き、自分の意見を主張できるようになった。

今回は「話し合いの基礎」ということで考えてきた。今後は、授業の中で生徒が自由に意見を出し合い、一つの作品をめぐる活発な討論ができるような授業展開に発展させたい。

最後に大きな課題である評価の具体的方法について述べる。

① 事前評価……「発表や討論などに対する意識調査」「職業観アンケート」を行い生徒の今までの経験や、話すことに対する意識を調べ今後の授業に生かす。

② 事中・事後評価

ア 生徒の相互評価……実際の発表・ビデオをみて感想・疑問・意見を文章化し発表者に提示する。発表者はそれに答えることで自分の考えを整理し確かなものにできる。また発表の仕方や話し方を理解し工夫させる。できるだけ文章表現とし一方通行ではなく、発表者にも弁明の機会を与える。

イ 自己評価……自分の発表をビデオで見ることで、自分の発表の仕方・話し方などを反省しどうしたらうまく話せるかを考えさせる。

ウ 指導者の評価

(ア) テーマについての例示…文章が書けない生徒に、助言を与え場合によっては机間巡視による個別指導を行う。

(イ) 各プリントでの評価……「テーマでの文章」「スピーチを聞いての文章」を回収し5項目程度の加点法で評価する。この際評価の基準は明確に生徒に提示する必要がある。また、できるだけ客観的な評価基準であること。

(ウ) ビデオを見ての評価……生徒のまとめた「よりよいスピーチのための数項目」から、客観的に評価できる項目を選び、あらかじめ生徒に提示しておく。
レーダーチャートにして視覚的にも分かりやすいものを作る。

(エ) 作文による評価……授業終了後「感想文」を書かせ今後の授業に生かす。

Ⅳ まとめと今後の課題

生徒の主体的な学習態度を育てるには、教師の意識転換が最も必要とされる。このことを踏まえて、今回、次の点に留意した。①生徒の興味・関心を引き出す教材の発掘、②きめ細かな段階的な指導、③生徒同志の磨き合いの場の設定、④評価方法の具体的な工夫、である。その結果、次のような成果が得られた。

現代文においては、詩の教材の理解できない語句や表現を基に生徒自身が問題を作成し、それをクラス全体で考えていくという形での授業が展開されたが、このことは、詩を自らの力で解釈する一歩となった。また、主題に関連しての作文では、お互いの意見の交換を通して自らの在り方生き方について考えを深めていった。

古典においては、教師主導型の授業を改める工夫として、グループによる課題学習を取り入れたが古典の世界の面白さに気付かせることに効果的であった。また、グループ学習は良い意味での競争意識を持たせるところとなり、授業外において図書館を利用した学習を行うなど、積極的な学習活動が展開されるようになった。

文章表現においては、生徒相互の添削・批評により、自分の意志を伝えることに持っていた甘えを去り、自分の意志を正しく伝える表現の在り方を模索するよう変わっていった。また、他の生徒の生き方と接していく中で、自らの生き方に対する考えを深めることができるようになった。

音声言語においては、自分達の行ったスピーチのビデオを見ることを通して、自分が話す際に何が欠けていたのか、自らの力で気付くようになった。また、自分の論を確かなものとするために具体的な資料を集めるなど積極的な学習活動を展開するようにもなった。さらに、相手の話を意欲的に聞くようになり、進んで話し合いに参加するようになった。

今後の課題としては以下のことが挙げられる。

1. 主体的な学習態度を身に付けさせるためには、継続的・段階的な指導が重要であるが、これを3年間の指導計画の中の発達段階に応じた位置付けについての検討が必要である。
2. 生徒の主体性を育む教師の評価について、さらに、一層望ましい方法を研究することが必要である。
3. 数値にのみ関心が集中してしまったなどの反省もある相互評価の在り方について、工夫改善を図ることが必要である。
4. 話すこと及び聞くことの態度を養う指導を通して自由に自分の意見を出し合い、積極的な話し合いができるような指導方法の工夫改善を図ることが必要である。